

【町田そのこさん×武内市長 対談フルバージョン】

市長 いつもお世話になっております。今年すごいですね。

町田 7冊出しました。

市長 2ヶ月に1回ぐらいのペースですね。

町田 そうですね、特に年末は毎月。10月から1冊、1冊、2冊なので。

市長 その一つ、「コンビニ兄弟」5作目が11月28日に発売されて、いよいよドラマ化も発表されました。北九州市にとっても大きなことですし、本当にうれしいことです。

町田 夢みたいで、半信半疑の気持ちもあります。「コンビニ兄弟」を書き始めた時はまだ新人で、誰も私の本を読んでいないのではないか、と不安に駆られていました。地元の魅力を書けば他の地域の作家さんよりうまく書けるのではないか、という希望から始まったのですが、こんなに大きく成長するとは。地元の方々も応援して愛してください、うれしいばかりです。

市長 「コンビニ兄弟」は韓国、台湾でも人気を博しています。今回のドラマ化を機に、門司だけでなく北九州市の皆さんにも読んでいただきたい。そして、北九州市・門司の持っているまちの魅力や、人の関わり合いの素晴らしさを思い起こすきっかけになればと思っています。

あらためて、「コンビニ兄弟」という作品で表現したかったことを教えていただけますか。

町田 人と人とのつながりって加減がとても難しいですよね。ともすれば「おせっかい」と言われる気遣いもある。でも、「あの人の手助けがしたい」という気持ちが尊いことに変わりはない。そういう心を作品に込めているつもりです。

市長 確かにコンビニって、声をかけ合ってつながることもある一方で、それぞれが距離を置いて関わらない姿もありますよね。その時代の人の関わり合いが凝縮されて現れる舞台になっているのかもしれません。

町田 日常に溶け込んでいるからこそ、そこに一番人と人との関係が浮き彫りになりやすいんじゃないかなと思っています。

市長 門司港のまちの魅力は、どんなところにあると思いますか。

町田 私は学校で授業についていけない時、門司港に行っていたんです。海を見ながらお弁当を食べて本を読んで。家には帰れないし学校にも行きたくない……それを、私には居場所がないのだと思っていました。自分の情けなさやふがいなさ、みっともなさと向き合う場所が門司港だったんです。そんな門司港は「つらさから逃げ込める場所」でもありました。私の負の感情をただ受け止めてくれるというか……。私の思う門司港の魅力は「どんな感情を抱いていても受け入れてくれる場所」ですね。

市長 包容力というか奥行きがあるというか、そういうところを感じられるまちですね。

町田 多くの観光客を迎えている場所だからでしょうか、人と人との距離感もほどよいと思っています。ぼうっとしている時に、「あっちのお店おいしいよ」とか「雨降ってるから雨宿りしていきな」とか声をかけてもらったこともあるんです。

市長 町田さんが本を好きになったきっかけや、本を読み続ける動機は、今のお話ともつながっているんでしょうか。

町田 小学生の時にいじめに遭っていて、教室に自分の居場所がない時は、大好きな本を持ってトイレに行って読んでいました。本の中の希望に救われていたんです。大好きな作家さんの新刊情報を見て、「来月になったらまた続きを読める」。それを待つことで、いじめに耐えてきました。

物語は人を生かすこともできるし、そして私はその本を読むことで人間的に成長したと思っているんですよ。人を恨んだことって特になくて、どちらかというといじめに遭っても立ち向かう私がかっこいいはず、そうすることで物語の主人公たちに近付けるはずっていうふうに思ったので、本は人を生かすし人を育てるという理念のようなものを持っているんです。そこを守りながらこれからも書き続けていくんじゃないかなと思います。

市長 今の時代、孤独を感じたり理不尽さを抱えている人にこそ読んでもらいたいですね。

町田 自分が苦手な人でも、好ましく思う一面を持っているかもしれない。深く共感する部分があれば、世界すら変わるかもしれない。そういう、人や世界を見る角度を変えるきっかけをくれるのが物語だと思うんです。私は物語によって救われたし、心を育てることができた。おこがましいですが、私の読者さんたちにも同じような読書体験をしてもらえたうれしいです。

市長 私も日々忙しくする中で、そこから癒やすために本を読むっていうのが大事な要素になってますね。試験前になると小説を読みたくなるのと似てますよね。

町田 あと大掃除の途中とか。「今じゃない！」と思うけど、出てきた本を読んで続きも探しちゃって大掃除終わらないんですよ、それ年末の私ですよ（笑）。

市長 あらためて、2025年、どうでした？執筆で大変お忙しかったと思いますけれど。

町田 そうですね、私個人としては2025年はチャレンジの年にしようと決めていて、今まで自分が書かずにいたジャンル、避けていたジャンルを積極的に本にしたんですよ。例えばサスペンスであったりホラーであったり、そして12月にはファンタジーを出版したんですけど。

市長 新しい領域にどんどん出ていこうと。

町田 いろんなジャンルにチャレンジをしたら、改めて自分の原点に帰った時に、もっと質の高いものが書けるんじゃないかなと。2026年で作家10年なので、その前にもっと実力をつけたい、自分の腕を磨きたいという気持ちがありました。

市長 町田さんは「こういうふうに自分は進んでいきたい」とプランニングされる方なんですか。

町田 仕事に対してはだけです。作家っていう仕事は、なりたくてなりたくて憧れてなれたものなので、そこにだけは妥協したくなくて。他のことは割とだらしなくて人間的にも未成熟なんんですけど、仕事に関してだけは誠実でありたいなと思っています。なので、10年前の自分を振り返った時に情けないなって思いたくないなっていう気持ちがすごくあります。

市長 ずっとなりたかった作家という仕事に対して、ものすごくリスペクトをしているし、丁寧に道のりを歩んでいきたいという思いがあるんですね。

町田 せっかく作家になれたのだから、おろそかにはしたくないなって。そこだけは、自分の人生で一番真摯なんじゃないでしょうか。なんで笑うんですか（笑）。

市長 いやいやいや。その謙遜がね。私も自治体のリーダーになりたくて、実は20~21歳で決意したんですよ。「自治体の長になる」と。

町田 早くないですか？だって21歳っていいたら大学生ですよね。

市長 そうです。大学3年生の時、東京でコンプレックスにさいなまれていた頃に『鄙の論理』（注・細川護熙、岩國哲人著）という本を読んで「地方から国を変えよう」「いつか必ず自治体のリーダーになろう」と。今ようやくそういう仕事なんで、丁寧にそれをやってるってことはありますね。

町田 続けるためのコツというかモチベーションの保ち方みたいなものってあるんですか。

市長 あの時に東京に打ちひしがれたことの、悔しさ・情けなさ、コンプレックスや怒りみたいな、そういうものが腹の底にずっとあって、必ずこの思いを達成していきたい、それが自分の生きてる意味だ、と思い込んでいました。あと、今お話しいただいて思ったんですが、思うに任せないこととかきついこと、うまくいかないことがあった時に、これは自分の将来抱いている夢や志を達成するために必要なプロセスなんだとか、これはそこに至るための物語・ドラマ、肥やしになってるんだっていう前向きな消化の仕方をしたり。

町田 すごく分かります。私もコンプレックスと怒りでここまで来てるんですけど、たくさんの先輩たちがいてあの人たちの行けるところまで私も行くんだったらどのルートがいいのかとか、この道がダメだったらこっちの道から行くべきかとか何が足りないからそれを用意しなきゃとか、そういうことを常に考えてるんですよ。私はコンプレックスの塊で、「私が作家になれるはずがない」という消極的な考えに長くとらわれていました。やっと手に入れた仕事を自分の怠慢で軽んじたくないです。

市長 せっかくその仕事に巡り合わせてもらった中で、ここで手を抜いて、後になって「もっと目いっぱいやればよかった」と思いたくないというのは私もすごくありますね。

町田 いつか振り返る時に自分だけは分かるじゃないですか、どこで手を抜いたかとかどこで情けないことをしたかとか。だからそれだけは絶対にやりたくないなと思ってやっています。

市長 頭の片隅とかほとんど潜在意識の中でちょっとここ手抜いたって思った時に限って本当にうまくいかない。これが悔しいんですよ。

町田 小説もありますよ。このシーンはこれでいいでしょうって流したら本になって読み返した時にそこが一番ダサいことになってるんですよ。気付いてたのに、なんでここで流したんだろうって思うことはすごくあって、でも本だからもうどうしようもないんですよ。

100%やり切ったと思っても、毎回、校了した後に修正点に気付いて後悔します。その後悔が次の作品での課題、目標になるんですよ。ミスを踏まえて、前作よりもよりよくするぞ、と。自分の実力に対する「情けなさ」も原動力の一つなのかもしれません。

市長 職人というかもう道を極めるみたいな感覚ですよね。

町田 でもそれが一番楽しいと思うので天職だなとは思ってます。

市長 精魂、命を削るじゃないけど本当に絞り出してきつい作業だと思います。物語を書きたいというのはどんな瞬間とかどんな人に会った時に湧き上がってくるんですか。

町田 お祭りなど、人の熱意や活気があふれている場所に行った時や、魅力的な人に会った時です。私はにぎやかなところが苦手で避けがちなんですが、そういう場所で輝いている人……自分と真逆だと感じる人に接すると強い刺激を受けます。「この人の考えはすてきだな」「どんな喜びや苦しみがあるんだろう」と興味が湧いて、勝手に物語が走り出します。

市長 出会った人にインスピレーションをもらって衝動のように出てくるんですか。

町田 そうですね。あとは児童虐待であったり困っている人のニュースとかを見るとモヤモヤして、私の身近にあったらどうするだろうというところから物語を書くこともあります。私だったら、私の家族だったら、私の好きな人だったらこれはどうするだろうみたいなところから問題と向き合って、書くことによってその問題を自分の中で落とし込むということをやっています。なので問題提起として小説を書くというよりは、自分が事件とか事象と向き合うために小説を使っている感じです。

市長 それを自分の中で受け止めてそしゃくするための方策としての物語というところもあるんですね。

町田 傷付く人、搾取される人って必ずいて、そういう人たちがどう生きていくか、どこに希望を見出しかみたいなことを考えるということもあります。人の強さか人の醜さ・残酷さ、どちらか触れた時に物語が動くと思います。

市長 人って、利他的で助け合ったりする一方、欲がものすごく支配したり……といわれることもありますが、「人」についてどう思われますか。

町田 私はどうしても人に希望を持つてしまうので、悪者というか悪役を書くときには、なぜ彼・彼女がそこに至ったのかっていうところを書きたいになります。

現実って本当に希望がなかつたり救いがなかつたりすることってたくさんあって、でも物語だからこそ救いと希望がなきゃダメだと思っているんです。人は救われたいというか何か光を見たくて本を開いたりするんじゃないかと思うので、小さな光を必ずどこかに入れたいなと考えています。

市長 ちょっとズームアウトした話になりますが、今、世界でもいろんなことが起きていて、日本でも外国人の話だとSNSだといろいろなことが言われていますが、町田さんが個人的に今の世の中で気になっている事象はどんなことがありますか。

町田 私もひとりの親ですので、どうしても子どもに関わることは気になります。子どもたちが搾取されないような社会づくり、子どもを守るシステムがまだ日本は弱いのではないかと感じています。子どもたちが伸び伸びと生き、安全に学んだり自分の生きたい道を進んだりといった可能性を広げられる社会であればいい、そういう動きの一助になりたいと漠然と考えています。

市長 日本はかつて、欧米人が日本人ほど子どもを愛して大切にしている民族はいないというぐらいだったのに……最近は、子どもたちの声がうるさいと言って公園をつぶすとか、子どものとらえ方が変わってしまっているように感じるんですけど、これはなんでなんでしょうね。

町田 子どもを育てるって大変なことですよね。例を挙げれば、子どもを優先したいけれど子どもに手をかける時間を思うように取れない、仕事を簡単に休めない、とか。子どもを育てる大人にも余裕がない中で、どこまでできるかという問題もあると思います。

市長 子どもを持つことにある種の軽いスティグマを持つてしまうような状態だと、生まれてきた子どもたちも自己肯定がしづらくなる可能性もありますし、子ども政策委員会という、子どもたちが市長と一緒にどんなことを街でやるべきかを考える場があるんですけど、子どもたちが妙にバランス感があるんですよ。エアコンが体育館に入らないと部活ができない、でも予算の問題もあるからそこは可能な範囲でとか、公園でこれしちゃダメあれしちゃダメとかじゃなくてちょっとだけ危険なことも含めてドキドキするような公園にしてほしい、でも周りの大人たちには迷惑をかけないようにおとなしく遊びますとか。よほど大人より子どもの方がいろんなものに気配りしているというか。

町田 子どもだからといって、分かりやすいというわけではないですね。しっかり意思があって、本音と建て前を使い分けることもできる。大人に見せないところで何を思っているか、隠すこともできる。それは決して悪いことではないけれど、そこに付け込むシステムが存在するのはよくない。子どもが大人に素直に甘えることができ、万が一のときはSOSを発しやすい社会であってほしいですね。

話は少しそれますが、自分の置かれた状況に余裕がないと本を手に取れない、と私は思っています。今、読書離れが問題視されていますが、作家をなりわいにする者として、本を読み物語を愛する人を増やしたいと思っているんですね。物語からいっぱい学んでもらえますように、と願って書いている部分もあるんです。私は子どもの頃、たくさんの本を心置きなく読めたんですが、それは安心した環境にいたという点が大きいと思います。大人も子どもも、余裕をもって共に読書を楽しめる世界であってほしいです。

市長 さっきおっしゃったように、本は自分の中の引き出しを増やしてくれますしね。ある時には自分の逃げ場というか癒やしの場にもなってくれるし、正しいことばっかりじゃなくて世の中にいろんな感情があるんだということを確かめられる場所でもあると思いますね。

町田 そうですよね。こうしたら危険なんだ、こういう行動はこんな結果になるかもしれないんだ、という追体験もできます。そういう学びも本でできるので。

市長 最後に「コンビニ兄弟」の話に戻りますが、「コンビニ兄弟」は、門司港レトロともタイアップ企画が行われています。作中のコンビニをイメージしたフォトスポットや、言葉と景色が融合するアート展示など、小説の世界観を体験できる仕掛けが用意されています。

町田 門司港のまちの魅力は、書いても書いてもまだ書き足りない、まだ3割くらいしか書いていないんじゃないかと思っているので、これからも書き続けていきたいです。

市長 ぜひ、多くの方に「コンビニ兄弟」を読んでいただき、ドラマも楽しんでいただきたいですね。そして、本やドラマをきっかけに門司港のまちを歩いて、人と人とのつながりや「おせっかいな優しさ」を感じてもらえばうれしいです。

最後になりますが、2026年、どんな1年にしたいですか。

町田 飛躍の年にしたいです。作家になって10年になるので、これまでのチャレンジの成果を出したい。これまで以上に質の高い物語を書く年にしたいです。

市長 ぜひ素敵な1年にしていきましょう。ありがとうございました。